

### 三、詩人

わたしは自分が詩人だと思って、（当然夢の中で）街を歩きながら材料を探した。

護国寺街を東に歩いていると、向こうから棺桶がやってくるのを見つけた。それは白松の空の棺桶で、人力車に載せられ、一人が曳いて、ゆっくりときた。車の左には女が一人付き添って、手には一歳にもならぬ子どもを抱いている。彼女は親の亡くなった時の喪服を着ていたが、身につけた白衣と頭の白布はいずれも古く汚れていて、すでに一カ月あまりも着たものようだった。彼女は歩きながら、車夫と話をしていて、少しも悲しそうな様子が見られない。——彼女の悲哀はおそらく苦しみのために凍ってしまい、覆われてしまったのだろう。わたしは死者はどんな人か、生者はどんな人か、そして死者と生者の過去を想像し、鉛筆を取り出して書き止めようとした時には、彼らはすでに全く姿を消していた。

今度は西四北大街の大通りである。夜の驟雨が過ぎたばかりで、大通りはきれいに洗われて、石の一つ一つまで突き出ているが、両側の土の道は泥の池のようにぐちゃぐちゃである。東側の路傍には三四人が立ってぼかんと眺めている。わたしも近づいて見ると、それは馬が一頭死んで横たわっているのだった。車の方はとっくに行ってしまう、この馬を捨てて行ったのだ。頭を南に向け脚を東に向けて路傍に横たわっている。これはたぶん普通の馬だったのだろう。だがそこに横たわっているととても痩せて小さく見えた。土の道の真ん中を引きずってから、また向きを変えたのだろう。だからその上側（つまり左側）の顔と腹と前後の脚は皆湿って黒く一面の泥で汚れていた。その胸はもう動かないが、喉のあたりはまだシューシューと音を立てている、でもそれはすでに生き物の声ではなく、風が破れ障子を通るような一種無生の音でしかなかった。わたしはふとロシアのシCHEDリンが馬の一生を語った物語『コニェク』を思い出して、筆を取り出してノートに書きつけたと思ったら、また全てが消えてしまった。

詩の材料がありながら、詩にならないのは、とても辛い。だが幸いなことにこれで夢から醒めることができた。

※初出：1922年8月20日『晨报副刊』